２０２５／１１／２３　　礼拝メッセージ　　大江郷子　牧師

主　　題　：　救いの本質と目的ー補足と適用⑦ー　それではいかに生きるべきか②
聖書箇所　：　ローマ人への手紙　１２章２節

先週からローマ１２：１－２をともに学んでいます。ローマ１－１１章まででパウロは、神が私たちに与えてくださったいつくしみ、恵みとあわれみについて述べていました。私たちに与えてくださった神の救いですね。その上で、１２章から神は私たちにさまざまな命令を与えます。勧めと命令です。その最初の命令が、「霊的な礼拝をささげなさい」ということでした。私たちは主によって救われたがゆえに、あの特別な働きであった祭司に任命されたわけです。託されたのです。王である主の祭司として、自分自身を主にささげるわけです。イスラエルの祭司たちは動物を主にささげていました。でも、私たちは自分自身を生けるささげ物として主にささげて、そして私たちは、王である主の祭司として神を礼拝していくのです。具体的には、私たちは神の前に正しい歩みをすることによって自分自身を感謝のいけにえとしてささげる、ということでした。贖いのいけにえはもう終わっているので、私たちは感謝のいけにえを神にささげるということでした。ですから１２：１にあるように「**あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。**」ということです。「**聖い**」というのは「切り分けられる」ということでしたね。特別な働きのために私たちは切り分けられたのです。ではどこから切り分けられたのでしょうか。私たちは世から切り分けられたのですね。世から切り離されて、私たちはキリストと一つにされたということです。そして、この「**神に受け入れられる**」というのは「**聖い**」ということであり、「**聖い**」というのは「**神に受け入れられる**」ということです。つまり、神に受け入れられるものは聖いものであり、神の前に聖いものを神は受け入れられるということです。

では、私たちが祭司として、神に自分自身を聖い生きたささげ物としてささげるために、私たちはどのように歩んだらよいのでしょうか。どうしたらそれができるのでしょうか。そのことをきょう２節からともに学んでいきたいと思います。私たちが自分自身を聖い供え物として神にささげるための秘訣は二つあります。２節では二つの命令がされています。一つは、「**この世と調子を合わせてはいけません**」、これも命令です。もう一つは、「**心の一新によって自分を変えなさい**」、２０１７年版でしたら「**変えていただきなさい**」と訳されていますよね。「**変えていただきなさい**」という方が原文のギリシャ語に近い訳になります。この二つのことをきょうは一緒に学んでいきたいと思います。

１．この世と調子を合わせない

まず一つ目に、「**この世と調子を合わせてはいけません**」。私たちが主の祭司として自分自身を聖い供え物として神にささげて、私たちが正しい歩みをなしていくために、私たちが霊的な礼拝をするために、最初に覚えておかなければいけないことは、この世と調子を合わせてはいけないということです。「時代」ということを表すことばが「この世」ということばに使われています。ギリシャ語の「コスモス」ということばも、「世界」とか「世」を表しますが、それとは全く違う意味を表す「神に逆らう、悪に支配されたこの世の流れ」ということを特に強調することばです。Ⅰヨハネ５：１９で「**私たちは神からの者であり、世全体は悪い者の支配下にあることを知っています。**」とヨハネは言っています。私たちは神の所有とされたのですよね。私たちは神の支配下にあるのです。しかし、世はサタンの支配下にあるということです。「**悪い者**」というのは、サタンのことを表します。

では、「調子を合わせる」とはどういうことでしょうか。「調子を合わせる」というのは、定められたパターンや型に、内面ではなく外面で従い、仮面をかぶったり演技をしたりする様子を表します。つまり、行動や発言などの外側が、世の型に押し込められて成形される状態です。プレスして型を作るのと

同じことです。ですから、私たちは救われた者として内面が変わったのに、外側が世の型にプレスされて、自分の外側の行動や行い変わるということですね。それが「調子を合わせる」ということです。

では、「世のパターン」とか「型」とはどういう意味でしょうか。それは、この世の価値観や考え方、この世の行動、この世の行いなどありとあらゆるものを指します。人の幸せとは何かもクリスチャンと世の人では考え方が全く違いますよね。何を大切にするのか、しないのか。どのように子どもの将来を決めるのか。どんな仕事が尊敬される良い仕事なのか。どんな服装をしたいと願うのか。何のためにお金を使うのか。自分が自由となる時間を何に使うのか。何が正義で、何が悪いのか。世の人とどこに出かけ、何をするのか。どんなことば遣いをするのか。それらは人の目からどのように評価されるかにかかわらず、人の目から見れば「これは良いことだ」と思えるものであったとしても、みことばを見たときに、それが神に背を向け、神に敵対している世から出ているがゆえに、それらはすべて悪です。神の栄光を現さないものはすべて悪です。それは以前お話ししたと思います。みことばを読んでいくときに、「厳しいですよ」と。

そしてこの命令は、１節に「**そういうわけですから、兄弟たち。**」とありますから、クリスチャンに向けて書かれたものです。つまり、この世に調子を合わせていたクリスチャンがいたのです。そのクリスチャンたちに対して、「あなたがたはこの世から切り離されたのでしょう。そしてキリストと一つにされたのでしょう。神の所有とされた者なのでしょう。神様の特別なあわれみ、恵みを受けた者なのでしょう。ですから、神の奴隷として、神に仕える者として、主人である神のみこころは何なのか、何が良いことなのか、何が神に受け入れられるのか、神の前に何が完全で聖いのか、それを追い求めなさい。」とパウロは述べているのです。なぜかというと、私たちの主人であるその主のみこころをなそうとするときに、私たちは主が何を考えておられるのか、そのみこころを知る必要があります。そうでないと、私たちは主のみこころをなすことができません。また、以前「神の奴隷である」ということを学んだときにもお話ししましたけれども、神に仕える者がいつも考えていること、いつも思っていることは、主人が何を考えているのか、それだけですよと。だからこそ神様は聖書で、「あなたがたの必要はわたしが満たすから、そんなことを第一に求めるのではなくて、神の国と神の義を第一に求めなさい」と命令されていましたね。私たちはまずそれを見るのだと。

そして先ほども言いましたが、私たちは新しく創造されたのです。私たちの内側が変わっています。クリスチャンですから。ですから、ここで言う「この世と調子を合わせる」というのは、私たちの内側と外側の食い違いです。齟齬（そご）のことを話しています。内側と外側が違うわけです。そのことが「この世と調子を合わせている」ということです。「あなたがたは救われたはずなのに、外側がこの世にプレスされて、この世の型にはまっているよ」と言っているのです。ですからことばの意味に注目して、少し意訳かもしれないですが訳していくと、このようになります。「世のパターンや型にあなたが押し込められてはなりません。世に倣って、まるであなたがクリスチャンではなく世の人であるかのようにふるまいながら世で生きてはなりません。」と。あなたは救われたクリスチャンなはずなのに、世の中でまるでクリスチャンでなく、この世の人のように「私も仲間ですよ」というように、この世で生きてはなりません、と。それが「この世と調子を合わせる」ということです。私たちがキリストと一つにされているのに、キリストが私たちのうちにおられるのに、まるでクリスチャンでないかのように、主とは関係ないかのように生きてはなりませんということです。

この「調子を合わせる」ということばは、新約聖書の中では２回しか出てきません。もう一つがＩペテロに出てきます。Ｉペテロ１：１４－１６には、こう書いてあります。「**:14 従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな<u>欲望に従わず</u>、」**、この「**従わず**」というのが「調子を合わせる」と同じことばが使われています。「**:15 あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい。:16 それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖で**

なければならない」と書いてあるからです。」と。ローマ１２：２では「**この世と調子を合わせてはいけません**」でしたが、このＩペテロでは、「あなたがたは自分の欲望に従ってはいけません。」、「欲望に調子を合わせてはいけません」と警告されています。そして、論理の展開は同じです。神が聖であるから、あなたがたも聖く歩みなさいと。ローマ１２：２では、「神は聖であるから、あなたがたは自分を正しい者として神にささげるように。この世と調子を合わせてはいけません」ということです。

さて、使徒２６：１７－１８では「**:17 わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。:18 それは彼らの目を開いて、<u>暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ</u>、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって<u>御国を受け継がせるため</u>である。**」と。ここでも相反する二つのことが並べられていますよね。「**暗やみ**」か「**光**」か、「**サタン**」か「神」かです。先ほど話をしましたが、私たちはキリストの御国を受け継ぐ、キリストの所有とされた者ですね。「**御国を受け継がせるためである**」と書いていました。私たちはキリストの御国を受け継ぐ者です。一方、この世はサタンの王国の支配下にあります。

私たちは確かにこの世の人々と様々なことを共有します。彼らと一緒に仕事をします。彼らと同じ地域に住んでいます。時には趣味とかスポーツで、彼らと一緒に何かする付き合いがあるかもしれません。また悲しいことですけれども、血の分けた家族であって肉親としての絆があるかもしれません。しかし霊的には、私たちクリスチャンと救われていない人々とは全く相入れないのです。相反する存在です。霊的には敵対関係にあります。ですからヤコブ４：４でこのように書いてあります。「**貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。**」。世の仲間となって神の敵となるのか、それとも私たちは世の敵となって神とともに歩むのか、どちらかしかない。これは相反する、相対立する存在だということです。

もちろん、この世の人々と私たちが友人になってはいけないということをここで話しているのではありません。そうであれば、私たちはこの世から出て行かなければならないでしょう。みことばにもそのように書いてあります。実際に主イエスご自身も罪人とお付き合いされました。主イエス・キリストも取税人や罪人と一緒に食事をしましたね。なぜなら主イエス・キリストご自身がおっしゃったのです。「**医者を必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。**」（マルコ２：１７）と。主イエス・キリストは、当時忌み嫌われるような人々と一緒に食事をし、交わりをされたのです。ただ、この世の中の、自分自身の罪を認めない人々からは、主は憎まれましたね。ヨハネ７：７に「**世は……わたしを憎んでいます。わたしが世について、その行いが悪いことをあかしするからです。**」と書いてあります。それを考えると、私たちも世と交わりますね。しかし、それは、私たちが彼らに対して神の栄光を現すためです。私たちが彼らに対して主のみことばを宣べ伝えるためです。だから霊的には相反するのです。私たちがなぜ彼らとつき合うのか。それは神の栄光を現し、神のみことばを宣べ伝えるためです。決して彼らの仲間になるわけではありませんよね。全然違います。

それゆえに、主は弟子たちについて、父なる神にこのように祈っておられます。前もお話したようにヨハネ１７章、まさしく主の祈りのところです。主が十字架にかかる前に、主イエス・キリストが父なる神に祈られている、その祈りの中です。ヨハネ１７：１４－１６にこうあります。まず１４節には「**:14 わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。**」と。「**わたし**」というのはイエス様ですね。「**彼ら**」というのは弟子たちのことを表します。「**あなたの**」というのは父なる神様のことです。ですから主イエス・キリストは弟子たちに、父なる神様のみことばを与えました。しかし世は弟子たちを憎みました。イエス・キリストがこの世のものでないように、弟子たちもこの世のものでないからです。「**:15 彼ら**（弟子たち）**をこの世から取り去ってくださるようにというのではなく、悪い者から守ってくださるようにお願**

いします。:16 わたし（主イエス・キリスト）**がこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。**」、主はここで、弟子たちをこの世から取り去ってくださいとは祈っていないのです。不思議ですね。それよりも「悪い者から守ってください」と。多くの人々はこの「**悪い者**」をサタンと考えています。なぜかというと、弟子たちには大切な働きがあったのです。それは、神の栄光を現すことです。神は弟子たちを通して神の栄光を現すことをみこころとされたのです。ですから、取り去られるのではなく、「**守ってくださるように**」と父なる神様に主イエス・キリストは祈られたのです。

私たちも一緒です。私たちも世と全く交わらないわけではありません。家族もいますし、友人もいますし、仕事に行かなければならないし、そこに住んでいるのですから。では、なぜ霊的に相反するのに私たちがそこに置かれているのか。神様は何でもおできになるので、救われた瞬間に取り上げてくださることもできたわけではないですか。この世の常識で考えると、「あ、いなくなった。クリスチャンになったんじゃないか。」と。でも神様はそこに私たちを置かれているのですね。神様は私たちを通して神の栄光を現すことをみこころとされているからです。ですから私たちは、この世と全く関係がなくなるわけではありません。しかし同調するわけではありません。同調できないのです。彼らとは霊的に住む世界が全く違います。相反します。だからこそ、私たちが神によって救われたこの内側を隠して、外側を世からプレスされて、外側がまるでこの世の人のように歩んではいけないということです。私たちは世の光、地の塩として歩む責任があるのです。それなのに救われたことを隠して、私たちが人から見られたときに、まるで世の人と変わらないように生きてはいけないということです。

そしてここで覚えておかなければならないことがあります。とても大切なこと。それは、私たちも以前はこの世のものであったということです。ですから、私たちはこの世から影響を受けやすいということです。私たちは依然としてこの肉体を持っています。以前エペソで学んだように、この肉体は、この世に共鳴したくなるのです。そうですよね。サタンが私たちを悪い方へ導こうとするときに、自分も神に逆らって歩みたいと願う肉体を私たちは持っています。ですから、私たち自身がこの世に共鳴したがっている肉を持っているということを、私たちはよくわかっておかなければいけません。私たちには弱さがあるのです。そして、エペソ２章から学んだように、私たちがこの世の中を歩んでいる時には、サタンとこの世と肉が三つ巴となって私たちに霊的な戦いを挑んでくるのです。まさしく霊の戦いです。だからこそ、ずっと１－１１章までは神の救いについて、神のあわれみと恵みについてパウロが語った後に、１２章から具体的な命令が始まるわけでしょう。その最初でパウロが、「**この世と調子を合わせてはいけません**」と記したことを、軽く考えてはいけません。この世の危険というものを、パウロはよく知っていたのです。

私たちは常にこの世の考え方にさらされています。例えばテレビや新聞、インターネット、雑誌……。様々なものを通してこの世の考え方は私たちに入ってきます。「私たちはニュースしか見ません」と言っても、そのニュースの中にも非常に邪悪な情報がいっぱいあることをわかっておかなければいけません。ですから私たちがテレビを見る時に、携帯を開いてニュースを見る時に、その内容が神に逆らった邪悪なアイデアに満ちていることをきちんとわかった上で開かなければいけません。なぜなら、彼らは創造主なる神の存在を認めようとしません。多くの人々は存在すら認めようとしません。ましてや神に信頼して、神に服従して、神のみに喜びと満足を見出そうとなど、絶対にしていません。それどころか、法律などはみことばの影響を受けているとよく言いますが、テレビやインターネットでは、そのような法律に逆らって、自由気ままに生きることがクールであるかのように、そういう情報が絶えず流れてきます。ですから、私たちは世に対して警戒心をなくしてはいけません。自分の心の扉を開いて、リラックスして、テレビの前に座ってはいけません。インターネットを開いてはいけません。旧約聖書に「**わきまえのない者**」ということばがありますが、「**わきまえのない者**」とは「心を開く者」という意味です。悪に私たちの心を開いてはいけません。詩篇や箴言で絶えずそれが警告されていることを私たち

は覚えておかなければいけません。私たちは主に救われた者として、自分の聖さを保たなければならないのです。

今読んだヨハネ１７：１４－１６に「**:15 ……悪い者から守ってくださるようにお願いします。:16 わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。**」とありましたが、その後すぐに続く１７節にこう書いてあります。「**真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。**」と。みことばが私たちを聖めるのです。詩篇１９：７には、このように書いています。「**……【主】のあかしは確かで、わきまえのない者を賢くする。**」。悪に警戒心を持たずに心を開く者を賢くするのは、主のみことばです。私たちはキリストと一つにされた者です。キリストと常にともにいる者です。ですから、キリストと一緒になって、私たちはいったい何を見て、何を聞き、そして自分たちの心の中で何を考えるのか。私たちの心をどのように用いるのか、私たちはよく考えなければいけません。この世は主イエス・キリストの敵です。世は私たちの主を憎むものです。ですから、この世のパターン、型に心を開いて、無防備に取り入れて、それに押し込まれて、それにはめられていってはなりません。私たちはむしろ、この世の考え方ではなくて、神のみこころを求めるべきです。私たちが求めることはこの世の考えではありません。主イエス・キリストのみこころです。

この前、私が妻の実家で過ごしているときに、女子大生の娘がうんざりした顔で私の横に座ってきました。彼女は日中、大学にいます。比較的良い友人には恵まれていますが、キリストを知らない者たちですから、彼女らの話の中心はファッションであり、おいしい食べ物であり、ライブの話であり、ＳＮＳの話です。今、女子大生に流行っている“ＢｅＲｅａｌ．”というのをご存じですか。常にタイムリーで「次は友だち４人で写真撮ろう」とか、「次は何々写そう」と言って、クラスが終わったら４人集まって写真を撮って、全然知らない人に送る。「写真撮っていい？」と言われたら、「どうぞ」と写真を撮らせるらしいのです。そういうことをしない人は本当にわずかで、大学で、「やめて」と言うのはうちの娘だけらしいのですが、それぐらいポピュラーで、今そういうのが流行っているらしいのです。彼女はそれに疲れきっていましたし、妻の実家に帰ってくれば、クリスチャンではない人もいますから、絶えずテレビがついています。ほとんどニュースなのですが、夕食を終えてうんざりした顔をして私の横に座ってきたので、「じゃあ、一緒にゴスペルでも聞こうか」と言って、ふたりでリビングの片隅でゴスペルを聞き始めました。「このことばはどういう意味なんだろう」と、一緒に調べたり、私がみことばを学んだことをふたりで分かち合ったりしていたら、たちまち彼女の目が輝いてくるのです。そして彼女の口から賛美が出てきます。１時間ぐらい一緒に神様を賛美しながら過ごしました。

この世に汚れた私たちの心を、みことばが洗い流します。私たち自身を元気づけます。私たちに喜びを与えます。ですから私たちが一日のうち、もし１時間２時間とテレビやインターネットの時間を使って、そして３０分しかみことばを開かないようになれば、明らかにバランスが欠けています。人は言うかもしれない、「それはストイックだよね」と。でもみことばを見たときに、いったい私たちがどの立場に立たされているのか、世はどういう存在なのかということを考えたときに、やはり私たちはしっかりと世に対して警戒心を持たなければいけません。しっかりと私たちはみことばを見て、神様のみこころに思いを寄せなければいけません。私も含めてすぐに、すぐに私たちはこの世に引き寄せられます。それだけの危険性が私たちにあります。ですから言っているのです。律法主義的で言っているのではなくて。自分がいったい何を見ているのか、自分が普段何を聞いているのか、自分が普段心の中で何を考えているのか。主のしもべとして、主に仕える者として私たちはよく考えなければいけません。ですからパウロは「この世と調子を合わせてはいけない」と最初に命令を出しているのです。ここから続くたくさんの命令の中で、一番初めにこの命令をしているのです。

２．自分自身を変え続けていただく

二つ目に私たちが王である主の祭司として自分をささげるためになすべきことは、「心の一新によって自分を変えられ続けなさい。」ということです。神に受け入れられるものは、良いものでしたね。神に受け入れられるものは、完全なものです。イスラエルの民が礼拝に動物のささげ物をささげるとき、彼らは、良いもの、傷のないもの、完全なものを持ってこなければいけませんでした。当たり前ですよね。神様は聖い方なので、神様は完全な方なので。私たちが神様を礼拝するときに、「もったいないから、このちょっと傷ついてあんまり使い物にならないものを持って行ってささげようか」と考えるなら、それは神様に対する礼拝ではないでしょう。マラキ書のところで神様は明確に警告されています。ですから私たちが自分自身を神様にささげようとするとき、私たちも神様に受け入れられる者へと変えられ続けていかなければいけないということです。

ここで「変えられ続けなさい」ということばは、受け身で書かれています。２０１７年度版は「**変えていただきなさい**」と正しく訳されています。「**心の一新によって自分を変えなさい**」は、「変えられなさい」ということです。神様がされることです。そしてここは継続の表現が使われていますので、「変えられ続けなさい」ということです。そしてこれは神様からの命令です。先ほどは、自分の内側が神様によって救われたにもかかわらず、外側がこの世の型に押しつぶされて、まるでこの世の人間かのように外側がなってしまうという、外側と内側の食い違いの話をしました。今回はそれとは違い、「あなたは変えられたでしょう。その変えられたとおりに歩み続けていきなさい」という、外側と内側の一致の話です。

この「変えられ続けなさい」というところで使われていることばは、新約聖書で４回出てきます。今私たちが学んでいるローマ１２：２、マタイ１７：２、マルコ９：２、Ⅱコリント３：１８と、この四つしか使われていません。このうち、マタイとマルコは、主イエス・キリストの山での変貌の記事で出てきます。マタイ１７：１－３にはこう書かれています。「**:1 それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。:2 そして彼らの目の前で、<u>御姿が変わり</u>、**」――この「**御姿が変わり**」というのは、「変えられ続けなさい」と同じことばが使われています。「**御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。:3 しかも、モーセとエリヤが現れてイエスと話し合っているではないか。**」と。これはヨハネやペテロがいた時のシーンです。これはどういうことかと言うと、主イエス・キリストも私たちと同じように肉のからだを持っておられましたね。ところが、主イエス・キリストの内には神の栄光があったのです。ヨハネ１７：５にも「**世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で……。**」とありますが、主イエス・キリストの内側に栄光があったわけです。その栄光が内側と一致するかたちで外側に現れたのです。そして、外側が白い光のように輝くようになった。外側と内側との一致の話をしています。主イエス・キリストの内側の栄光が外に現れたかたちです。ですから、ここで「一新によって変えていただきなさい」というのが意味しているのは、「あなたがたはキリストと一つになったのだから、内側が変えられたのだから、それにふさわしく、外側の歩みも一致させて歩みなさい」ということです

では、どうやって私たちは変えられていくのでしょう。内側も外側も変えられていくのでしょう。答えは「**心の一新によって**」変えられていくのです。では、「**心の一新によって**」変えられていくとはどういうことでしょう。この「**一新**」ということばは、新約聖書では、このローマ１２：２とテトス３：５の２回しか出てきません。しかし、これは新約聖書の中でも非常に大切な概念です。テトス３：５にはこう書いています。「**神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と<u>更新</u>との洗いをもって私たちを救ってくださいました。**」、この「**更新**」ということばに、先ほどの「**一新によって**」と同じことばが使われています。ですから、同じことばが、日本語では「**一新**」とか「**更新**」と訳されているのです。ここには「**聖霊による、新生**」とあります。これは「新しく生まれる」という意味です。「**更新**」というのは「日々新しくされていく」という意味です。先ほども言いました

が、２回しか出てこないけれども、すごく大切な概念だということです。ですから、この「**更新**」とか「**新生**」と訳されていることばの類似語はたくさん出てきます。そのうちの一つがガラテヤ６：１４－１５です。「**:14 しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。:15 割礼を受けているか受けていないかは、大事なことではありません。大事なのは新しい創造です。**」、この「**新しい創造**」の「**新しい**」というのが、「**更新**」や「**一新**」というのと同じことばの類似語です。ここであかしされていることは、「**世界は私に対して十字架につけられ**」た、もう世界は私に対して何の影響力も及ぼさないということです。「**私も世界に対して十字架につけられた**」、私はもうこの世に引き寄せられる者ではない。世に戻って神の救いを捨てようとする者ではないということです。世は私にとって何の魅力もない。大事なのは「**新しい創造**」だということです。

ではどのようにして新しくされるのでしょう。私たちが日々新しくされていくために必要なことは、私たちが御霊に満たされることです。御霊なる主の働きによって私たちは新しくされていくのです。先ほどのテトス３：５でも「**聖霊による、新生と更新との洗いをもって**」と書いていますね。聖霊によって私たちは日々新しくされていくのです。御霊なる主、御霊なる神様は、私たちの上に働いて、救いへと導いてくださいました。その御霊なる主は、私たちが救われた時にすべて救われた者の心のうちにいてくださり、御霊なる主は、もう二度と取り去られることはありません。

では、私たちがどのようにすれば、救われた私たちの心のうちで御霊なる主が働かれるのだろう、どのように私たちは御霊なる主によって満たされていくんだろう、どうして私たちは御霊なる主によって日々新しくされていくんだろう、ということの方が問題ですね。その答えは、みことばによって、です。私たちはみことばによって、御霊なる主の働きによって変えられているのです。つまり御霊なる主というのは、みことばを通して働かれるわけです。この聖書を通して。みことばを通して主は私たちに働かれます。みことばを通して主は私たちの心を満たしてくださいます。そして私たちは日々新しい者へと変えられていくのです。それを通して私たちは神のために新しい者と変えられ続けていき、私たちはその自分自身を主にささげて主を礼拝するのです。

では、なぜみことばを通して御霊なる主が働かれるとわかるのでしょう。私たちが御霊なる神様に満たされるためにはみことばを学ばなければいけないと、なぜわかるのでしょう。つまり、ある人たちは御霊に満たされるために、ものすごく熱心に祈ったり、ものすごく熱心に賛美したりします。「御霊なる神様、満たしてください」と。祈ることがダメだと言っているわけではありません。祈りも大切です。しかし聖書を見る時に、みことばを通して御霊なる主が働かれるのです。エペソとコロサイのみことばを見比べると、御霊なる主がみことばを通して私たちに働かれることがよくわかります。エペソ５：１８－２０には、「**:18 ……御霊に満たされなさい。:19 詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。:20 いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。**」とあります。「**心から歌い、また賛美しなさい**」や「**主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。**」、この後に、「**妻たちよ**」、「**夫たちよ**」という命令が続きます。これがエペソ５章ですが、６章からは「**子どもたちよ**」と言って命令が続くのです。では、コロサイ３：１６－１７ではどう書いてあるかと言うと、「**:16 キリストのことばをあなたがたのうちに豊かに住まわせ**」、この後「**知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。:17 あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。**」と書かれています。またコロサイも、エペソと同じように「**妻たちよ**」、「**夫たちよ**」、「**子どもたちよ**」と言って具体的な命令に入っていきます。まるで並行箇所のようによく似ています。

では違うところはどこかと言うと、最初の命令です。エペソ５章では「**御霊に満たされなさい**」と命令されています。コロサイでは「**キリストのことばをあなたがのうちに豊かに住まわせ**」なさいと命令されています。日本語ではわかりにくいですが、原文ではこの「**住まわせ**」なさいというのもきちんと命令形で書かれています。ですから、エペソ５章では「**御霊に満たされなさい**」と命令され、コロサイでは「**キリストのことばを……住まわせ**」なさいと命令されているのです。そうするとわかることは、御霊に満たされるときに大切なのは、私たちがキリストのことばを私たちのうちに豊かに住まわせることですね。私たちがキリストのことばを私たちのうちに豊かに住まわせることによって、私たちは御霊に満たされるのです。熱心に祈ることでも、一生懸命賛美を歌うことでもありません。私たちがキリストのことばを私たちのうちに豊かに住まわせることによって、私たちは御霊に満たされていくのです。

「**キリストのことば**」とは、「聖書」のことです。「**住まわせ**」なさいというのは、「家に住む」という意味のことばが使われています。ですからパウロはここで、「みことばを、聖書を私たちの生活の中に住まわせなさい」と命令しているのです。また、この「**豊かに**」というのは、単なる豊かなという意味ではありません。「途方もなく豊かに」という意味が使われています。「途方もなく豊かに、あなたの心にキリストのことばを住まわせなさい」ということです。つまり、日々の生活の中にあって、私たちはキリストのことばによって自分自身の生活をチェックして当てはめていき、私たちの考え方、私たちの発することば、日々の行いのすべてにみことばを影響させていきなさい、みことばがあなたの生活すべてを支配するようにしなさいということです。ですから、みことばを心のうちに、聖書を私たちの心のうちに豊かに住まわせるということは、ものすごく神学を勉強して、ただ単に知識を増やしていきなさいという意味ではありません。そのみことばを私たちの生活に適用していくのです。私たちがみことばのとおりに歩んでいくのです。私たちがみことばを学ぶときに、御霊なる神様が私たちがみことばを理解することができるように導いてくださいます。単なる知識だけではなく、私たちがしっかりとみことばを理解することができるために、御霊なる主が働かれます。私たちがそのみことばを適用したいと願ったときに、御霊なる主が働いてくださり、私たちを助けてくださり、力強めてくださって、私たちがみことばのとおりに歩むことができるように導いてくださいます。ですから、先ほども祈りが大切でないわけではないと言いましたが、私たちはみことばを単なる知識として学ぶのではなく、そのみことばのとおりに歩みたいわけです。私たちは主に仕える者です。だからこそ、主が何を考えておられるのか、主が奴隷としての私に何を願っておられるのかを知らなければなりません。「ああそうですか、わかりました」と言って、何もしなかったら、忠実なしもべではありませんよね。ですから私たちは、神様のみことばを私たちが実践していこうとするのです。でも、自分の力ではできません。ですから、私たちがみことばを学ぶときには、祈って御霊なる主の助けをいただきながら、そのみことばを実践していくのです。そもそも理解しようとするときに、「主よ、このみことばを理解することができるように助けてください」と祈りつつ、みことばを学んでいくのです。そして主の助けを願い求めながら、私たちはそのみことばの命令に従っていきたいと願い続けながら歩み続けるのです。それが御霊に満たされたクリスチャンの姿です。それが御霊に満たされるということです。

これと似たような教えがⅡコリント３：１８にあります。「**私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに<u>姿を変えられて行きます</u>。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。**」と。先ほど、「変えられ続けなさい」ということばは新約聖書で４回使われていると言いましたね。先ほど三つ説明しましたが、四つ目がこの箇所です。この３：１８「**主と同じかたちに姿を変えられて行き**」という部分にローマ１２：２の「変えられ続けなさい」と同じことばが使われています。正確に訳せば、ここも継続の表現が使われているので、「主と同じかたちに姿を変えられ続けて行きます」と訳せます。私たちも鏡のように主の栄光を反映させながら主と同じかたちに姿を変えられ続けていくのだと。これはまさに御霊なる主の働きによるものです。

どのような話の流れでこの箇所が出てきたのか。この節の前を見ると、私たちクリスチャンとイスラエルの民が比べられています。イスラエルの民は、旧約聖書の時代からパウロの時代に至るまで、聖書を通してキリストを知ることがありませんでした。彼らは旧約聖書を読んでいたのに、キリストを知ることがなかったのです。イエス・キリストがよみがえられた時、エマオの途上で弟子たちと一緒に歩かれましたよね。その時にイエス・キリストはご自身の生涯について、十字架のわざや復活について弟子たちに語られました。何を通して語っておられたのでしょうか。旧約聖書を通してです。イエス・キリストは弟子たちに「聖書に書いてあるでしょ」とおっしゃったのです。主イエス・キリストの預言があるので、旧約聖書を見たときに主イエス・キリストのことがわかるはずなのです。ところが、イスラエルの民は旧約聖書を読んでもそれを理解できませんでした。なぜかというと、顔におおいがかかっていた、心におおいがかかっていたからです。少し前に戻って見ましょう。Ⅱコリント３：１４－１５に書いてあります。「**:14 しかし、イスラエルの人々の思いは鈍くなったのです。というのは、今日に至るまで、古い契約**（旧約聖書）**が朗読されるときに、同じおおいが掛けられたままで、取りのけられてはいません。なぜなら、それはキリストによって取り除かれるものだからです。:15 かえって、今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心にはおおいが掛かっているのです。**」、彼らは旧約を読んでも、主イエス・キリストのことを悟ることができませんでした。おおいがかかっていたからです。

では、そのおおいを取り除く方法は何でしょうか。たった一つだけです。御霊なる主の働きのみです。Ⅱコリント３：１６－１７にはこのように書かれています。「**:16 しかし、人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです。:17 主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。**」と。自由とは何ですか。罪からの解放、罪からの自由です。御霊なる主が働いてくださることによって、心のおおいが取りのけられ、私たちがみことばを読むとき、私たちの心のうちに御霊なる主が働かれて、それをしっかりと理解することができるようになるということです。少し先に進んで４：６にはこのように書かれています。「**「光が、やみの中から輝き出よ」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。**」これは御子なる主の働きによって、私たちが救われたことを示しています。

そして３：１８に戻ると、私たちは御霊なる主の働きによって救われただけでなく、キリストに似た者と変えられていくことも御霊なる主の働きによってなしていく、ということです。私たちが御霊なる主の働きによって心のおおいを取りのけられてみことばを読むときに、そのみことばを通して主を見ることができるようになりました。私たちは主に祈りつつみことばを読みます。みことばを理解できるように、私たちの生活に適用できるように、主の助けを求めつつみことばを読んでいくのです。そのときに私たちはみことばを通して主の栄光を見るのです。イスラエルの人々は多くの聖書の知識を持っていましたが、どれほど聖書の知識を得たとしても彼らが決して悟ることができなかった主の栄光を、私たちは御霊なる主の助けによって、みことばを通して見ることができるのです。私たちはただ単に知識だけでみことばを身につけるのではなく、御霊なる主の働きを通して、主ご自身を個人的に知るために聖書を読むのです。ですから主の助けは必要です。そして、私たちはみことばを通して主ご自身を見、主の栄光を見ていくのです。そうして私たちの内側がキリストに似た者と変えられていくことを通して、先ほどの内側と外側の一致の話。私たちの外側も主に、キリストに似た者として変えられ続けていくのです。行いとことばも、です。そして私たちはその自分自身を主にささげ、礼拝していくのです。ですからⅡコリント３：１８に、もしことばを足すなら「**私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、**（みことばを通して働かれる）**御霊なる主の働きによるのです。**」ということになります。そして私たちは主の祭司として自分自身をささげていくのです。

「変えられ続けなさい」とありますが、これは受け身で書かれていますね。ですから変えてくださるのは神様ですよね。そして「続けなさい」とあるので変えられ続けていくわけです。でも不思議なことに、これは命令形で書かれていますね。神様が私たちを変えてくださるのに、なぜここで命令されているのでしょうか。命令されているということは、私たちが変えられ続けていくためには、私たちは何をすればよいのでしょうか。エペソ２：１０で神様は約束してくださっていますね。神様が私たちを変えてくださるから、私たちは神の作品であり、神の傑作品なわけですよね。

では、変えられるために、私たちにはどんな責任があるのでしょうか。それは、私たちは主を見続けるということです。みことばの学びを通して主を知り続けること、主の栄光を見続けるということです。そのときに主が私たちを変えてくださるのです。私たちのうちには罪に勝利する力はありません。私たちが自分の力で罪に対して勝利しようとすれば、そこにあるのは、惨めな敗北のみです。多くのクリスチャンは自分の力で神の聖さに到達しようと考え、そして戦うのです。しかし注意して考えておかないといけないことは、そのような行動は、この世と調子を合わせた行動です。なぜなら、それは世の考えだからです。サタンの罠です。だからこの世と調子を合わせてしまっているのです。自分の努力で、自分の力で神に受け入れられる者として自分を主にささげようとするのです。そして、恵みのみによる救いに目を向けずに、私たちは敗北続きの信仰生活を歩んでいくのです。

なぜこれがこの世と調子を合わせることになるのですか。なぜ自分で変わることが、自分の力で神の要求に応えようとすることがこの世と調子を合わせることになるのでしょうか。それは、この世のほとんどの宗教が努力によって神の要求を満たそうとしているでしょ。献金をささげる、あるいは一生懸命伝道する、ある人は一生懸命奉仕する。自分のからだを打ち叩いて正しい歩みをしようとするなど。そうすることで神の要求を満たそうとするのです。わかりますか。その中に神が抜けているのです。ですからこれは、厳しい言い方をすると、邪悪な偶像礼拝です。

マタイ２３：２７でイスラエルの指導者たちをイエス・キリストは厳しく批判されていますね。あなたがたは外側はきれいに白く塗られたように見えるけれど、中は汚いもので満たされている墓と同じだ。「**外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。**」とあります。確かにそのような人々は、外側は正しいクリスチャンのように人から見えても、その人の内側は、罪に対する敗北の上に敗北を重ねた結果です。彼らの心のうちは邪悪なもので満ちています。周りの人の目から見ればその人たちは正しいように見えるかもしれません。一生懸命しずしずと歩いているので。人の目から見れば、信仰熱心に見えるかもしれません。尊い人のように見えるかもしれません。しかし、その態度は偶像礼拝にすぎません。心のうちには邪悪なものが満ちているのです。イエス・キリストがイスラエルの指導者を批判されたように。

その人たちがすべきことは、すぐに自分の罪を主に告白し、悔い改め、自分のすべてを主に明け渡し、主にのみ信頼することです。そのような生活を始めるということです。御霊なる主の助けをいただきながら、誠実に忍耐強く私たちはみことばを学び続けなければなりません。神に受け入れられることは何か、何が聖いことなのか、何が良いことなのか、私たちはみことばから学び続けなければなりません。そのときに私たちの内側と外側の一致が生じるのです。内側がキリストに似た者と変えられていくことによって、それを反映させて、私たちの外側もキリストに似た者と変えられていくのです。私たちは主の助けをいただきながら、主から力をいただきながら、それを実践していくのです。自分の力ではありません。祈りつつみことばを学び、そして私たちはそのみことばに従って歩みたいと願い続けながら、主に助けをいただきながら学んでいくときに、主が、私たちが実践しようとする時に助けてくださり、キリストに似た者と変え続けてくださるのです。ですから私たちがすべきことは、諦めずに、いつもみことばを通して主を見続けること、それだけです。あとは主が私たちをキリストに似た者へと変えてくださり、私たちをキリストの栄光を現すように主が変えてくださるのです。

ヘブル１２：２には、「**信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。**」とあります。Ⅱテモテ２：８には、「**……死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。**」とあります。私たちはみことばを通して主を見ます。でも私たちは失敗をします。悲しいことに罪を犯しますね。しかし、私たちは確かに救われて変わった自分自身を知っています。私たちはもう罪を喜びとはしません。救われる以前のように罪を楽しみたくありません。そうですよね。罪を憎み、罪を嫌悪する者です。ですから、私たちはみことばを通して主を見続けるのです。私たちはみことばを通して、みことばによって神の聖さを知ります。みことばによって自分の罪を知り、みことばによって私たちは自分の罪を悔い改めます。みことばによって私たちは主の赦しとあわれみの豊かさを知ります。みことばによって私たちは主に信頼することの喜びを知ります。みことばによって私たちは主の私たちへの愛を知ります。みことばによって私たちは主ご自身の麗しさを知ります。主のすばらしさを知るのです。私たちはみことばを通して主ご自身を知るのです。私たちの救いは主から来ます。私たちの本当の満足は主のみから来ます。それゆえ、私たちは自分のすべて、全身全霊をささげて主に感謝の礼拝をするのです。主を礼拝しなければいけないから礼拝するのではなく、私たちは主を知ることによって、その感謝の礼拝を主にささげていくのです。先ほど読んだコロサイにも書かれていましたが、私たちはことばによると、行いによるとを問わず、私たちのすべてをもって主に感謝をささげていくのです。主が私たちに与えてくださった恵み、主が私たちに与えてくださったあわれみを主に感謝し続けるのです。それが私たちの霊的な礼拝です。

愛する兄弟姉妹、私たちは主から目を離してはいけません。墓からよみがえられた主、それゆえに今も生きておられる主。そしてやがてあの十字架の傷を帯びて私たちを迎えに来てくださる主。私たちはみことばを通して、いつもその主を覚えておくことです。いつも主を見続けることです。そのために私たちは救われ、そのために私たちは主と一つにされたのです。ぜひそのことを覚えて歩み続けましょう。様々なことがあって、失敗もあり、時には心が打ちひしがれることもあるでしょう。しかし、主が私たちを変えてくださると約束してくださったのです。私たちがなすことは、みことばを通して主を見続けることです。そうすれば、主が私たちを変え続けてくださいます。